

東京都台東区の通称「山谷」地区。戦後から格安の簡易宿泊所が立ち並ぶようになり、昭和30年代の高度成長期には1万5000人の日雇いの労働者であふれかえった。男たちの臭気が漂う街は、あまりに不衛生な「宿」を自嘲的に逆さまに読んで「ドヤ街」と呼ばれた。低賃金や劣悪な労働環境への不満が爆発し、35年以降、暴動が度々起こった。

現在、山谷という地名はない。だが、そう呼ばれる一画には今でも多くのホームレスや日雇いの労働者が暮らす。山本雅基(44)は平成14年

「さぼぼうのいえ」を設立した。32人の入居者のほとんどが元ホームレスや日雇いの労働者。「さぼぼうのいえ」なんてひやかされたこともあった」と静かに笑う。

みんな、命の期限を宣告されている。元エリート商社マンから前科者まで、過去にはさまざまな事情を抱える個性派ぞろいだけあって、もめ事も日常茶飯事。素直に介護を受ける老人はなかなかおらず、薬を飲ませるのですら一苦労だ。

まら語り もの語り

秋、ドヤ街の一角に、街でたつたひとつの在宅型ホスピス「さぼぼうのいえ」を設立した。32人の入居者のほとんどが元ホームレスや日雇いの労働者。「さぼぼうのいえ」なんてひやかされたこともあった」と静かに笑う。

「ホスピスを建てよう」。山本がそう決意し、都内で土地を探し始めたのは平成13年春のことだ。難病の子供たちの支援をするNPO法人の事務局長を務め、多くの子供たちの死を目の当たりにしてきた。「人はみんな幸せに死にたい。笑って暮らしてそのときを待つ。そんなホスピスを作りたかった」。多くの街を

「さぼぼうのいえ」

試練の人生 救いたい

歩き回って選んだのが山谷だった。彼自身、幼少から心が不安定だった。「人と真正面からぶつかってしまふ、不器用な性格だね」。父親が転勤族で、各地の小学校を転々としたが、行く先々で仲間にとけ込めずじめを受けた。「どぶ川に突き落とされて、つばを吐きかけられたこともあった。今でこそ笑えるけど当時はきつかった、本当に」。精神科に通い薬の助けを受け、心の救いを求めてキリスト教に改宗した。

そんな小学生時代に、ふと見たテレビ番組が今も脳裏に焼き付いている。画面に映し出されたのは、路地に生気を失った表情でへたり込む老人たちの姿。「彼らは何のために生きて、どこで死んでいくのか。あとになって、あの老人をホームレスと呼ぶのだと知った。いじめられっ子の自分も、一歩間違えば世間からはみ出て、あぁなってしまうかもしれない」。事実、20代で医療ボランティアを始めたが、人間関係になりにかけたこともある。食うあてのない人生は、山本にとって遠いものではなかった。

山谷を歩き、ホームレスたちと言葉を交わし、時に乱暴者も、また路頭に迷わせるわけにはいかない。ここを守るためならいくらだって頭を下げてやる。施設を建てて5年。大都会に、なぜ山谷という街が存在するのか、その意義がはつきりと思えてきた。行き場のない人間はみんな、心がずたずたに傷つき、人を憎んで人生を投げ出した。運転を誤って恋人を車でひき殺してしまい、罪悪感に耐えきれず破滅した男。派手な生活を送っていたが、パブル崩壊とともに倒産し、妻子に逃げられ自棄になった元社長。

「山谷は人生でここま試練を受けた人たちが集まってくる。これからはずっと、ひとつの『宿命』を山谷は持ち続けるのだと思う」。そしてこう続ける。

「出会ったときはみんな口が悪い。でも介護を通じて、人の愛情は絶対に伝わって、感謝の気持ちを取り戻すはず。人生最期の一瞬だっていい。私はここを、希望を失った彼らが再生し、旅立っていく場所にしたんだ」

「さぼぼうのいえ」は、ひねくれ者の永森さんは、死ぬ間際、入居者の友達にこんなことをつぶやいていらした。

「ここはよ、おれみたいなもの面倒を見てくれた。山本さんは、おれの親代わりみたいなもんだったよ」

敬称略
文国府田英之
写真 中井誠

「まち語り もの語り」は毎週日曜日に掲載します。



入居者と語る山本雅基さん
＝台東区清川の「さぼぼうのいえ」

東京・「山谷」地区

さぼぼうのいえ